総特集 卒業の日に

コメディーとワインとシャンソンと

特別版 講義の風景

('04.1.9—3114教室)

最終講義

文学部教授 鈴木康司

演題 「モリエールと17世紀フランスの医者たち」

構成＝編集室　カメラ＝西原香保里

〈笑劇〉描いた「社会の画家」

17世紀フランスの喜劇作家、モリエール（1622—1673年）の邦訳版は文庫本も多いが、いまでは神田神保町の古書店街を歩かないと手に入らないだろう。首尾よく「1冊100円コーナー」にあったりしたら幸いだけれど。

その点、中央大学図書館はすばらしい。開架コーナーの文庫本は在るべき場所に見当たらなかった（散逸？）ものの、奥の中央書庫にエレベータで下りると、原書を含めて多数が揃っている。『モリエール全集』全10巻（臨川書店）は2000年—03年刊と新しい。その第5巻には、「恋こそ名医」「人間嫌い」「いやいやながら医者にされ」が所収されている。巻末には仏研究者の研究論文「モリエールと医学」などもある。そう、この喜劇作家には医者を目のカタキにしたような作品が多い。人間嫌い、わけてもこの医者嫌いはどうしたワケだろう、と読みながら思う。

その由縁をていねいに読み解いていく最終講義である。——「モリエー

ルと17世紀フランスの医者たち」。

「イギリスの代表的な劇作家はシェークスピア、ドイツならゲーテですが、ではフランスではだれか。古典悲劇を描いたコルネーユやラシーヌもいるが、何百年にも亘る演劇史の流れで最高の演劇人はモリエール、と十人中十人が認めるでしょう」

そんな語りだしで、その作家像を、

「社会の風俗を風刺しながら描きだす〈画家〉だった」

と、鈴木康司教授は表現する。

前学長、わが国モリエール研究の第一人者である。

すずき・こうじ　1933年東京生まれ。東京大学卒。同大学院仏語仏文学博士課程満期退学。64年中央大学文学部専任講師、助教授をへて74年文学部教授、89～93年文学部長。99年から02年11月まで3年間学長として、中央大学のビジョンづくりや国際大学間交流につとめた。この間、理事、評議員、またパリ国際大学都市日本館館長も歴任。仏教育功労賞オフィシェ受賞。

研究の専門は17・18世紀のフランス演劇。著書に『わが名はモリエール』（99年）のほか、『闘うフィガロ――ボーマルシェ一代記』（97年＝芸術選奨文部大臣賞、中央大学学術研究奨励賞）。また『スタンダード和仏辞典』（80年＝毎日出版文化賞）も共同編纂した。

女子学生らで満員の大教室

《**スガナレル**　六日前から危篤状態の男がおりました。どうにも手の打ちようがなく、どんな薬もお手上げでした。で、最後の手段に吐き薬を飲ませてみようと思いついたんです。

ドン・ジュアン　助かったのか、そいつは？

スガナレル　いえ、死にました。

ドン・ジュアン　たいした効き目だ。

スガナエル　なんですって？六日の間も死にきれなかったのに、たった一撃であの世へ送ってやったんですよ。こんなによく効く薬がどこにありますか？》（「ドン・ジュアン」）

あるいは、

《**ジェロント**　どうか、先生、できるだけの手当をなさって娘の苦痛を軽くしてやってくだされ。

スガナレル　いや、ご心配なく。……（略）

スガナレル　お通じの中身は立派ですかな？

ジェロント　わしはどうもその点詳しくはありませんので。

スガナレル　（病人の方を向いて）腕を出して下され。（ジェロントに）なるほどこの脈ではお嬢さんが口を利かないわけですよ》（「いやいやながら医者にされ」）

テクストからの抜粋である。そのさわりの部分を教授が読み上げていく。「江戸っ子」自慢の、歯切れのよさ。よく通る声で。

文学部314教室はほぼ満席だった。学内・外の教職員も多いが、それ以上に学生やゼミの卒業生らの姿が目立った。鹿児島、大阪、京都、名古屋など遠方からの人もいる。仏文だから、それも圧倒的に女性たち。

入り口で、レジュメを渡された。詳細な、12ページにわたるものだった。

守旧派の医学を嗤う――劇作家の心

モリエールは他にも「プールソニャック氏」「病は気から」など医者を哄笑する作品を書き、みずから演劇人として舞台でも演じた。

17世紀、フランス革命はまだ100年以上先のフランスである。当時、「医学界はパリ大学とモンペリエ大学の2大勢力に分かれ、パリ大学が医学界の主流を牛耳っていた」そうだ。パリ大学はヒポクラテス以来の古代医学の砦で、対してモンペリエは新医学を取り入れようとしたらしい。

人と作品の背景に、こんな「時代の構図」が見えてくる、と鈴木教授

は語る。

「古代医学をただひたすら守ろうとする守旧派と、試行錯誤はしても医化学や新発見に刺激されて医学を進歩させようとする進歩派との闘いだったのです」

その中で、

「モリエールが嘲笑の対象としたのは、守旧派パリ大学の医者たちの愚かさやコッケイぶりでした」

と述べて、結論部へ向かう。

「モリエールは、自分の大学の権威にしがみつき組織をむりやり守る頑迷な医者たちに猛然と反発した。医学界全体を敵に回すことは、命とりにもなる。覚悟がいることでした。胸の病が進み、体調が悪化していた彼自身、長生きしたいというジレンマにも悩んだでありましょう。しかしまさに命をかけて、風俗の画家の目をもって、頑迷固陋な教条者たちの生態を描いたのです。

そして『病は気から』が彼の〈白鳥の歌〉になりました」

《アルガン　でも何故あんたは、人間が他人を治しちゃいかんというのかね。

ベラルド　それは、兄さん、われわれ人間の身体の中身がまだ窺い知れない謎であって、自然がわれわれの目の前に厚いとばりをおろしているので、これについて何かを知るにいたらないからですよ》（同3幕）

モリエール作品は、ボケとツッコミ風にときに吉本新喜劇の味わいさえあるが、このくだりなどその批評精神は十分に現代に届くだろう。

「病は気から」が上演されて4日目、モリエールは舞台上で倒れ、自宅に運ばれたがその夜のうちに死んだ。

「医者を信じなかったわけじゃない。財産目録には、2人の薬剤師へのツケが残っていたそうです」

そんなエピソードを紹介して、

「モリエールも死んだので、この話も終わりです」

拍手の中で、鈴木教授にいくつもの花束が贈られた。隣に紀子（みちこ）夫人。はじめての鈴木モリエール論の受講だったそうだ。

三浦信孝教授の司会ぶりは、いかにもフランス流、だろう。

「鈴木先生は、実学の中央大学で〝虚学〟の文学部から学長までつとめられた。文学部の学長は歴代わずかに3人。まさに模範的な教授であります。きょうのお話も非の打ちどころない模範的な最終講義、エグザンプレールなものでした」

そして、「実学―虚学」のタトエ話が、思いもかけず、第2幕・記念パーティー会場の劇を準備した、といえばいいか。

第2幕――「実学」と「虚学」

角田邦重学長（法学部）の挨拶が幕開けだった。

「ギー・パタンは、法学部にいるんじゃないか。私でなければいいが、と思いつつ聞きました」。ギー・パタン氏は、講義で聞いた守旧派・パリ大学の医学部長の名である。

「三浦先生の表現を借りると、〝虚学〟の懐の深さ、といいますか、〝虚学の力〟を感じました」

松尾正人文学部長は、鈴木教授を「文学部の良心」とたたえて、「実学の中央にあって良心をもった学部があっていい」と。そういえば学生と教員個人研究室が同居するのは文学部3号館だけである。『文学部50年史』編纂の折、なぜ文学部棟だけが？という声に、鈴木・当時学長は即座に「学生と一緒にいたかったからですよ。大学紛争直後の多摩移転時は、学生と心中してもいい、という気持ちだった」と語った、というエピソードも。

文明批評家・故福田恆存氏に「一匹と九十九匹と」という一文がある。九九匹の利益につくのが「政治」で

紀子夫人と一緒に。右は武藤脩二教授＝1410室のパーティー会場

あり、では「迷える一匹の羊」はどうなるのか。それを救うのが「文学」である。《政治の見のがした一匹を救ひとることができたならば、かれはすべてを救ふことができるのである》――そんな〝文学宣言〟を思い起こさせるような、文学部の意気あがるいい雰囲気なのである。

ワインの香り

ワイン・ボトルがテーブルに何本も並んでいた。「ええ、ワインの量を多くしてくれ、と言われましてね。種類もいろいろ用意しました」と生協・ウエイター氏。鈴木教授は名だたるワイン通でいらっしゃる。学長時代、秘書らにもヴィンテージものを振る舞われることがあったらしい。ある職員は「日本酒の銘柄はうるさいほうですが、ワインはまるで……。飲まし甲斐のない輩でして、恥ずかしい」と述懐する具合だが。

ワイングラスを手に、女子学生らが教授を囲んでいる。ケエン―猪俣志麻さん(41)は鈴木ゼミの卒業生。「20年ぶりの講義を聞きに」大阪から駆けつけたという。「フランス人と結婚したのも、鈴木先生にフランス語を教わったおかげです」と、花束贈呈で述べた。

絵になる？　花束贈呈

元文学部長、松本道介教授（独文）は、すこし角度を代えて、「モリエールをやってらっしゃるだけに、よく世間を見てらして、有能な行政官でもいらした」と鈴木教授を評した。「官庁なら事務次官は固い、と言う人もいたぐらいです。しかもスポーツ好きで相撲部の部長もなさった。『闘うフィガロ』を読むと、ボーマルシェと重なる部分があって、文学者の頼りなさではなく、生活力にも富んだ18世紀人の力を感じました。文学部は虚学の学部ではないのではないか、と鈴木先生を見ていると思うんですね」

「実学―虚学」論議もうまく着地して、そろそろ鈴木教授の挨拶である。

そしてエディット・ピアフ…

中大40年の思い。学長時代の話は避けて、鈴木教授は「学生諸君と一緒に暮らしてこれたことが私の非常におおきな喜びでした」と第一に挙げた。院生時代の60―62年、仏政府給費留学生としてパリ大学に学んだころを振り返る。当時、「日曜はダメよ」とエディット・ピアフの「水に流して」がパリ中に流れていたという。「ピアフのライブ公演を、私は2度見ているんですよ。ピアフが47歳の生涯を閉じたのは翌63年でした」

話はまた文学部の思い出などに戻りながら、「最後に、聞いていただきたいシャンソンがあります」――これは第3幕、のような。

ご自分のノドで、かと思ったのだが、カセットを使い、流れてきたのは、エディット・ピアフ、だった。テープのノイズさえセピア色の60年代をかもし出し、けだるくまた勁い歌声が会場をひたしていく。

「水に流して」……男性遍歴の末、ピアフが最後にめぐり会った20歳も年下の恋人との愛をうたった歌である。

歌が終わる。「ありがとう」という言葉で、Fin。粋に見えた。

締めくくりは再び三浦教授。ピアフの歌詞を取りだして、「私は後悔しない、やるべきことはすべてやった――と。鈴木先生のお気持ちそのものではないでしょうか。文学者は少しずつこけたところがあってもいいのですが、文字通りパーフェクト・プロフェッサーでいらした」

ワインの香り、エスプリの味。「最終講義」という劇の終わりも、仏文流にオシャレ、だった。